

16世紀後半のイングランドにおける写本の成立過程

——現存資料の調査をもとに——

能登原 由 美

(本学大学院教育学研究科)

はじめに

16世紀初頭、西ヨーロッパでは一度刷りによる楽譜の印刷技術が考案されたことにより、楽譜の生産と需要が急激に高まった。しかし、イングランドでは、楽譜の印刷・出版活動が浸透するのはイタリアやフランス、ドイツに比べると半世紀近く遅く、ようやく浸透し始める16世紀末においてもその規模は小さいものであった。大陸諸国においては、16世紀の前半においてすでに年に十数点もの楽譜出版が行われていたのに対し、イングランドでは最盛期の1597年においても年に7点の楽譜集¹の出版しか行われていない²。こうした傾向は17世紀前半を通じてほとんど変わらなかった³。

筆者は以前、イングランドにおけるこうした楽譜の印刷・出版活動の不振の原因の一つに根強い写本文化が影響していたのではないかと指摘した⁴。ここでは、16世紀後半においてもなお写本の受容が衰えず、逆に印刷楽譜の受容が伸び悩んでいた事実を明らかにすると同時に、その背景に、写本と印刷楽譜集の間にみられる相違—多様性と単一性—が影響していた可能性を示した⁵。しかし、16世紀後半のイングランドにおける楽譜の印刷・出版活動の展開に焦点をあてたこの小論では、考察の対象は印刷楽譜集であったため、写本をじかに調査することはできなかった。

そこで、本研究では、現存する写本の調査によって印刷楽譜集にはみられない写本ならではの特徴を示す。とりわけ、その成立⁶過程に焦点をあてることによって、写本の独自性を明らかにしたい。というのも、新しい楽譜の印刷技術考案による大きな変化の一つは、楽譜集が一度に大量生産できること、すなわち、生産までの時間の大幅な短縮化が挙げられるからである。したがって、写本が成立するまでの過程を明らかにすることによって、両者の相違をより明確にできるのではないかと考えた。

このように、写本と印刷楽譜集の相違を明らかにすることは、イングランドにおける楽譜印刷・出版活動の不振の原因を探ることに繋がるが、それだけではなく、印刷楽譜という新しいメディアの登場が音楽作品の伝達にどのような影響を与えたのか、ひいては音楽創作や受容にどのような変化を与えたのかを明確にするという点で、音楽史上においても大きな意味をもつ。これまで、写本研究と楽譜の印刷・出版活動の研究はそれぞれ、個々の写本や楽譜印刷家に焦点を当てて行われることが多く、作品伝達の手段、つまりメディアの変化という視点から捉えられることはほとんどなかった。

よって、本研究では16世紀後半に成立したと考えられる現存する写本を取り上げ、その成立過程につ

- 1 本研究では、複数の作品が綴じられた「作品集」を指す言葉として「楽譜集」という言葉を用いる。なお、これには、楽譜を掲載した宗教書や理論書、指導書の類は含まれていない。
- 2 イングランドにおける楽譜出版活動については、拙著「16世紀後半のイングランドにおける楽譜出版—音楽創作における出版の意義—」(博士論文、広島大学、2003年度)で詳しく論じている。
- 3 16世紀後半から17世紀前半にかけてのイングランドにおける楽譜出版数については、(Price, 1981, 209-213.)
- 4 拙著「16世紀後半イングランドにおける楽譜出版活動の展開—楽譜受容の視点から—」『音楽文化教育学研究紀要XVI』(広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学講座)(2004年)13-26頁。
- 5 同前, 17-18頁。
- 6 本研究において「写本が成立する」とは、写本全体が一つにまとめられた時点を指して言う。

いて考察する。しかし、当時、写本がどのように成立したのか、その過程についての記録はほとんど残されていない。そのため、本研究では現存する写本に残された記録—ここでは、写本の内容と写譜の状態—をもとに、ここから16世紀後半の写本にみられる特徴を抽出し、考察の手がかりとする。また、写本の成立過程は作成する目的によっても異なると思われることから、成立過程を考察する際には同時にその目的についても明らかにする。

1. 対象写本の抽出

16世紀後半のイングランドの写本について、その特徴を明らかにする前に、まず、16世紀後半にイングランドで成立したと推定される資料の抽出方法と、抽出する際に参考とした資料について述べておきたい。

大半の写本には、写譜の正確な年月日を示すような書き込みはみられない。したがって、写本の成立年代については、用紙や製本方法などのほか、収められている作品の内容などから年代を測定することになる。年代の測定は重要な作業であるが、それだけで紙面を埋め尽くすほどの大きなテーマとなるため、写本の特徴を見いだすことを目的とする本研究では、年代の測定については先行研究に依拠した。以下に示すのは、本研究が対象写本を抽出する際に依拠した先行研究である。

- ① Daniel, Ralph T. and le Huray, P. *The Sources of English Church Music 1549-1660. Early English Church Music Supplementary Volumes*, 1. London, 1972.
- ② Hofman, M. and Morehen, J. *Latin Music in British Sources, c 1485-c1610*. London, 1987.
- ③ Edwards, W. "Sources of instrumental ensemble music to 1630: British Isles." *New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed. vol. 24 (2000): 15-19.
- ④ Caldwell, J. "Sources of keyboard music to 1660: British Isles." *New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed. vol. 24 (2000): 36-39.
- ⑤ Ness, A. J. "Sources of lute music: English lute music." *New Grove Dictionary of Music and Musicians*. 2nd ed. vol. 24 (2000): 52-55.

これらの先行研究から、1550年から1600年にかけて成立したとみられる現存の写本は106点にのぼることがわかる⁷。筆者は、可能な限り現物を調査するよう努めたが、一部の写本については資料保存の問題上、マイクロフィルムやファクシミリ版でしか調査できなかった。また、世界に分散している写本の全てを調査するには時間がかかるため、先行研究ですでに調査されているものについてはその研究に依拠した⁸。その結果、本研究で取り上げることでできた写本は、対象写本全体の約9割にあたる93点であった(論文末に〔一次資料〕として掲載)⁹。

その93点の写本を調査した結果、ほぼ全ての写本から明らかにできるものであり、かつ、写本の成立過程を示す手がかりとして有効なのは、写本の内容—写本に収められた曲の作曲家やジャンル—と、写譜の状態—筆記、余白とレイアウト、タイトルと作曲家名の記載—について検証することではないかと考えられた。よって本研究では、写本の内容と写譜の状態を明らかにすることによって、16世紀後半に成立した写本の概要を示したい。

2. 写本の内容

ここでいう写本の内容とは、写本に収録されている曲の作曲家やジャンルのことである。

まず、作曲家について言えば、イングランド人のほか、イタリア人やフランス人による作品もかなりの

7 断片しか残されていない楽譜については除外した。

8 先行研究については〔二次資料〕として論文末に一括掲載した。

9 そのうち、先行研究に依拠した写本数は23点である。

10 例えば、BL Add. MS 30820-30822など。

割合で収められている。なかには、イタリア人作曲家の作品のみを収録した写本¹⁰や、フランス人作曲家の作品が大半を占める写本¹¹もある。さらに、作曲家は不詳だが、イタリア語やフランス語のテキストをもつ作品ばかりを収めた写本¹²もある。いずれの国の作曲家も16世紀に活躍した作曲家ばかりで、写本の成立とほぼ同時代の作品を集めたものが大半である。なお、1人の作曲家の作品だけを収めた写本は極めて少ない¹³。

次に、ジャンルについて言えば、モテトやミサ曲、アンセム、サーヴィスなどラテン語や英語による宗教作品から、マドリガルやシャンソン、英語によるソングなど多様な声楽曲がある。また、リュート・タブラチュア譜や鍵盤楽譜もあり、さらに、テキストが全くないか冒頭部分のみ書かれた、器楽演奏を想定したとみられる作品も数多くある。

しかし、写本の成立という視点からみて注目したいのは、収めている作品の作曲家やジャンルに統一性がみられる写本とみられない写本が存在することである。つまり、同じ国の作曲家の作品のみを収めていたり、マドリガルやモテト、リュート曲など同じジャンルの作品のみを収めた写本がある一方で、作曲家の時代や国が多様であったりジャンルが様々であったりする写本も存在する。本研究で取り上げた93点の写本に関して言うと、前者のように内容に統一性のある写本はほとんどなく、後者のように様々な作曲家による様々なジャンルの作品を集めた写本が大半であった。しかもその多くは、宗教声楽曲と世俗声楽曲に器楽曲まで加えた種々雑多な「寄せ集め」の写本であった。

3. 写譜の状態

写譜の状態については直接検証する必要がある。そこで、ここでは筆者自らが現物、あるいはマイクロフィルムやファクシミリを通じて検証した70点の写本を対象に述べる。

3-1. 筆記

写本の成立過程で最も重要な段階は、写譜の段階であるといえる。この写譜の段階を明らかにする上で大きな手がかりとなるのが、筆記である。筆記をみる限り、写本の大半は複数の者によって手写されたことがわかるが、その状態は音符などの音楽記号部分とタイトルや歌詞などのテキスト部分によって微妙に異なる。つまり、前者については、写本全体を通じて変わらないものもある一方で、後者については、写本全体どころか、1つの作品の中でさえ複数の筆記がみられるものが存在しているのである。これらの状態を綿密に検証すれば、写譜の順序や過程を明らかにする手がかりとなるのではないだろうか。よって、ここでは音楽部分とテキスト部分の2つに分けて考えたい。

他方、写本全体を通じて1つの筆記しかみられない例が若干ある。そこで、本節は(1)複数の写譜家による写本、(2)1人の写譜家による写本、と大別した上で、(1)については①音楽部分、②テキスト部分、について順次述べていく。

(1) 複数の写譜家による写本

① 音楽部分について

音楽部分を正確に書き写すためには、ある程度の音楽的な知識が必要とされる。そのためか、テキスト部分に比べ写本全体を通じて筆記が変わらないものが多々みられる。また、写本全体において複数の筆記がみられる場合でも、1つの作品の中で筆記が変わることはほとんどない。

興味深いのは、写本によって音符の配置の仕方が異なることである。つまり、狭いスペースに多数の音符が密集して配置されているものがある一方で、音符間にかなりの余裕があるものもある。前者のタイプ

11 例えば、ERO MS D/DP Z6/2など。

12 例えば、前者についてはTM MS 364-368、後者については、BL Roy. App. MS 55など。

13 筆者の知る限り、一人の作曲家の作品だけを収めたとみられる写本は2点ある。1点目は、ウィリアム・バードWilliam Byrd(c1540-1623)の鍵盤楽曲のみを収録した*My Ladye Nevells Booke* (現在は個人所有)である。2点目は、BL Roy. App. 36-40で、「Innocentio Albertiによって作曲された」との記述がある。(Catalogue of Manuscript Music in the British Museum, Vol. II, pp. 129.) を参照。

に多いのはテキストのない器楽作品ではあるが、テキストが付いているものもある。このような例は恐らく、音符よりもテキストが先に手写され、言葉の音節に合わせて音符を配置したため、音符間に余裕のない楽譜となってしまったのではないかと考えられる。逆に、音符間に十分な余裕を持たせた例もある。こうした楽譜では、テキストの文字と文字の間にはかなりの余裕があり、音符を先に手写したために文字の間にはさらにスペースが生じたものと考えられる。

② テキスト部分について

音楽部分の筆記に比べ、テキスト部分の筆記については複数の筆記が混ざっていることがより頻繁にみられる。しかし、通常は1つの写本で3、4種類の筆記が見られる程度であり、作品ごとに筆記が変わるというよりはむしろ、同じ筆記が複数の作品において続いた後に新しい筆記が次の数作品において続くことが多い。また、幾つかの異なる筆記が登場した後に再度、以前現れた筆記が登場する場合もある。なかには、2つの筆記が交代で現れる写本¹⁴もあり、こうした例は、写本成立までに特定の写譜家が終始関与していた可能性を示すと言えるだろう。

一方、音楽部分との大きな違いは、1つの作品においてさえ複数の筆記がみられる例が多々あることである。これらの例は、筆記の状態から判断して、一定の時間を経過した後に改めてテキストが書き加えられたと考えられる。例えば、TM MS 354では、歌詞の冒頭部分の筆記とそれ以降の筆記が異なっている(図1参照)。しかも、インクの具合から判断すると、冒頭部分と音楽部分の手写はほぼ同時期であるが、冒頭以降のテキスト部分の手写は後の時代のものではないかと考えられる。つまり、最初に楽譜を書き写す時点でテキストは冒頭部分しか書き入れられなかったが、後の時代に残りの部分が新たに書き加えられたと推測できるのである。書き込まれた理由として、当初は器楽演奏を目的として写譜されたが、後に声楽作品としても用いられるようテキストの残りの部分が加筆されたことが考えられる。こうした事実は、テキストを手写する過程を示すと同時に、写本の成立過程そのものを明らかにする重要な証拠となり得るだろう。

(2) 1人の写譜家による写本

もちろん、写本によっては全て1人の写譜家によって写されたとみられるものがある。こうした写本において注目すべきは、写本における写譜家の存在の大きさである。数は少ないが、写譜家の中には自らが手がけた写本に署名を残し、その結果、16世紀後半を代表する写譜家としてその名が後世にまで知れ渡っている者がいる。例えば、ジョン・サドラー John Sadler(1512/13-in/after 1591)、ジョン・ボールドウィン John Baldwin(d. 1615)、ロバート・ダウ Robert Dow(1553-88)などである。このうち、サドラーやボールドウィンによって写譜された楽譜には、自らの存在を強くアピールするかのようにならぬ名前が装飾付きで大きく記されている(図2参照)。このように自らの名前を誇示する行為は、複数の写譜家が関与したとみられる写本にはないものであり、これらの写本の成立における1人の写譜家の影響力の大きさを物語っているとと言えるだろう。

3-2. 余白とレイアウト

写本における余白の取り方には大きく2つのタイプがある。1つ目は、白紙のページはほぼ皆無で、各ページの中にもあまり見られず、余白があるとすれば下部に1、2段の譜表が残されている程度のものである。また、余白の取り方やレイアウトにある程度の秩序が見いだされるもので、写本全体が一定の規律のもとに製作されたことをうかがわせるものである。写本の成立に特定の人物—写譜家になるのか、写本作成を注文した人物になるのかはわからないが—や特定の意図が関与していた可能性を示すといえる。2つ目は、ランダムに白紙のページが挟まれていたり、各ページにおけるレイアウトも一貫性がなかったりするなど、規則性が見いだされないもの。先のタイプとは異なり、一定の規律のもとに作成されたとは見受けられないものである。

14 つまり、BL Add. MS 30480-30484.

3-3. 曲に関する情報の有無—タイトル¹⁵と作曲家名について—

総じて、16世紀の写本に収められている作品の多くは作曲家名を記していない。写本全体を通じて作曲家名を一度も記していない写本は70点中28点ある。逆に、必ず作曲家名を記している写本は僅か7点であり、しかもそのうちの2点は、楽譜の歌詞の筆記と異なる筆記で記されていることから後に書き加えられた可能性もある。タイトルについても同様に、当時は記されない場合が多かった。70点中37点の写本が、タイトルを全く記していない。こうした事実は、16世紀ではタイトルや作曲家名が楽譜を受容する者にとって大きな意味を持っていなかった可能性を示すと言える。

しかしここで重要なのは、タイトルや作曲家名の記載に一貫性がみられない写本の存在である。すなわち、70点中35点もの写本が、タイトルと作曲家名について記す場合と記さない場合があった。タイトルや作曲家名の記載の統一性の欠如は、DM MS Z3. 2. 13のように写譜家の交代によって生じたと考えられる例¹⁶もあるが、同じ写譜家においてもその記載に統一性がみられない例も多々ある。このように、タイトルや作曲家名の記載において一貫性がみられない写本は、余白やレイアウトの問題同様、写本の作成において一定の規律があったとは考えにくい。

4. 16世紀後半イングランドの写本の成立過程

4-1. 写本にみられる「統一性／非統一性」

写本の内容や写譜の状態をみる限り、写本が成立した過程は多様であったと考えられる。したがって、一般論を抽出することは非常に難しいが、前節で浮かび上がった写本の特徴の中に、写本の成立過程を解く手がかりとなる重要な要素が含まれていたと筆者は考える。それは、写本全体をめぐる「統一性／非統一性」という要素である。前節で見たように、写本の内容や写譜の状態には、写本全体を通じて統一性のある場合とない場合があった。つまり、写本に収められている作品の作曲家やジャンル、余白やレイアウトの取り方、タイトルや作曲家名の記載方法において、統一性のあるものとなないものが存在したのである。

この「統一性／非統一性」という問題は、写本全体に特定の影響力が及んでいたかどうかを示唆する点とは言えないだろうか。それは、一般的に写本が成立するまでの工程を考えるとよくわかる。当時の写譜は、一つ一つ手で書き写していくという時間と労力の必要とされる作業であった。とりわけ楽譜の場合は、よほど楽譜に精通した者でない限り、通常の文字以上に神経と労力を使うものであったと思われる。そのような作業を、多い写本で250枚近く¹⁷、平均的には50枚前後のフォリオを持ち、時には200曲以上¹⁸もの作品を収める写本を成立させるまで続けることになる。その上、本研究で調査した写本の多くは複数の写譜家が関与していたことが明らかであった。複数の者が関わる上に時間と労力を要する作業において、統一性の取れた写本が偶然生み出されたとは考えにくいのである。統一性のある写本を生み出すためには、写譜家自らが意図的に統一性を意識して写譜を行うか、あるいは写譜を命じた人物が意図的にそのように命じたかのどちらかであろう。

このような推測を裏付けるのが、16世紀から17世紀にかけて活躍した貴族で楽譜蒐集家の、エドワード・パストン Edward Paston (1550-1630)が所有した写本のコレクション（以下、パストン写本と呼ぶ）である。彼の膨大なコレクションのうち、16世紀後半に成立したと考えられるものは37点あるが、筆者自らが現物やマイクロフィルムを通じて調査した25点のうち22点もの写本が、余白やレイアウトの取り方、タイトルや作曲家名の記載の仕方において統一性が保たれていた。各写本のテキスト部分については複数の筆記が確認できるが、音楽部分についてはほとんど変化がみられないことが多いため、少なくとも音楽部分に関しては1つの写本で同一の写譜家が終始関与していた可能性が高い。そればかりか、コレクシ

15 本研究でいう「タイトル」とは、譜表の外側の余白部分に書かれたものを指す。

16 この写本は2人の写譜家によって作成されたと考えられるが、2人目の写譜家は曲の終わりに必ずタイトル（ここではジャンル名）を記している。

17 BL Add. 17802-17805はパートブック型であるが、白紙の譜表のみのフォリオを除いても243フォリオからなる。

18 BL R. M. 24 d 2. には、203曲もの作品が収められている。

ン全体を通じてレイアウトや余白の取り方、また写本の大きさにも共通点が見いだされるのである¹⁹。このような統一性を求めたのがバストン自身であるかどうかはここでは判断できないが、写本の成立に特定の人物の意図が働いていたことは間違いないだろう。

バストン写本以外にも統一性のみられる写本は幾つかあるが、こうした写本の写譜家は1人の場合が多い²⁰。このように、「統一性／非統一性」という視点は、写本の成立に終始一貫した影響力や意図が存在したかどうかを判断する上での1つの指標となると言える。こうした視点に則して、次項では写本の成立過程と作成の目的について考えてみよう。

4-2. 写本の成立過程と作成の目的

16世紀後半の写本においてより多かったのは、統一性のある写本ではなく統一性のない写本である。まずはこちらについてみてみたい。統一性のない写本では、譜表のみが書かれた白紙のフォリオ（以下、譜表フォリオと呼ぶ）を数多く含んでいることがしばしばある。例えば、BL Add. 29485は、写本の大半は楽譜の書かれたフォリオではなく譜表フォリオで、楽譜部分が26枚であるのに対し、譜表フォリオは45枚もある。同様に、BL Add. 31392も譜表フォリオをかなり含んでおり、楽譜部分が44枚であるのに対し、譜表フォリオが73枚もある²¹。譜表フォリオは、前者においては楽譜部分の後ろに、後者においては楽譜部分と楽譜部分の間に²²、それぞれまとめて綴じられている。

こうした事実は、以下のことを示しているのではないだろうか。それは、これらの写本所有者は、譜表のみが書かれた楽譜用紙をまず用意し、写譜する作品が入手される都度、写譜を行っていたのではないかということである。つまり、譜表の記入を写譜と同時に進めていたのではなく、前もって行っていたか、あるいはあらかじめ譜表の書かれた楽譜用紙を購入していたかのいずれかであったということである。実際、16世紀後半のイングランドでは、譜表のみが書かれた楽譜用紙の売り上げは比較的好調であったことが明らかとなっており²³、さらに、楽譜用紙をまとめて購入していたことを示す記録も残されている²⁴。そして、これらの写本の用紙も、あらかじめ購入されたものだったと考えられる。それは、先に挙げたBL Add. 29485の譜表が、手書きによるものではなく印刷によることからわかる。そして、譜表フォリオを含んでいる写本は、筆者が調べた70点のうち18点あったが、そのうち8点までもが印刷による譜表を使用していたのである²⁵。

以上のことから、これらの写本が成立するまでの過程は次のようなものであったと考えられる。つまり、まず楽譜用紙が用意され、作品が入手される度に写譜を行った。そのため、写本が成立するまでには一定の時間を要した。その結果、写譜家が複数となり、さらにレイアウトや作曲家名の記載に多様性が生じたと考えられる。こうして、長い期間の間に、作品が少しずつ書きためられた結果、写本が成立した。したがって、これらの写本の作成目的について言えば、時間の経過や写譜家の交代によって変化していったと考えられる。言い換えれば、写本全体を貫くような作成の目的や意図はなかったとみることができよう。

次に、全体に統一性のみられた写本についてみてみよう。先にも述べたように、統一性のみられた写本の大半はバストンが所有したものであった。これらの写本は統一性がみられるだけでなく、他の写本に比べ修正や加筆箇所が非常に少ない。また、作品はいずれも、短い場合は片側1ページ、長い場合は見開

19 バストンが所有する写本の大きさは総じて、横20～21cm、縦12～13cmのタイプが多かった。

20 例えば、BL Royal App. 17-22、BL Add. 36484、BL Mad. Soc. MS G 44-47、49など。いずれも、タイトルや作曲家名の記載は一切無く、レイアウトに統一性がある。

21 これらのフォリオ数は、いずれも筆者の調べによる。

22 この写本については、楽譜部分の後ろにも譜表のみのフォリオが6枚ある。さらにその後ろには、約20枚のフォリオがあった痕跡が残されており、この紛失した部分も譜表のみのフォリオであった可能性は否定できない。

23 (能登原, 2004, 17-18頁)。

24 例えば、Willoughby家の音楽に関する支出記録(Woodfill, 1953, 274.)。

25 筆者が調査した写本70点のうち、印刷による譜表を用いていた写本は僅か10点であったことから、この数値は非常に大きいといえる。

き2ページに収まるように写されていることが多い。筆記は音楽部分もテキスト部分も非常に丁寧で、スペースに余裕があるため読みやすい。したがって、演奏で用いるのに非常に適した写本と言える。しかし、パストン写本を体系的に調査したブレットは、パストンの写本作成の主眼は演奏のためというよりむしろ、コレクションの量的拡大にあったのではないかとみる²⁶。その根拠として、同じ作品が複数の写本で何度も現れること、誤って手写された部分についての修正などがみられないこと、さらに、演奏で用いられたことを示す痕跡がほとんど見つからないことを挙げている。確かに、パストン写本には修正、加筆のあとが非常に少ないことは先にも指摘した。また、シミなどの汚れも他の写本に比較すると非常に少なく、何度も演奏用に用いられたとは思われない。むしろ、コレクション全体を通じてみられる統一性を考えると、「コレクション形成」もパストンの写本作成の主眼の一つであったと考えるのは自然であろう。

数は少ないが、パストン写本以外にも統一性のみられる写本はあり、こうした写本の写譜家は1人の場合が多いことはすでに述べた。ここで重要なのは、このように写譜家が1人である写本の幾つかに、見られることを意識して作成されたと思われる写本があるということである。例えばBL Add. 36484は、レイアウトに特徴がある。つまり、各ページにおける譜表の数は3段から6段と不揃いだが、それは2番以降の歌詞を書くスペースを取るためであり、歌詞の量に合わせて1ページに入れる譜表の数が調整されていることがわかる。そして、いずれもテキストの冒頭の文字に装飾が施されている上、写本全体にはいたるところに装飾がみられる。写譜家が1人の場合、自らの名前を装飾つきで書き込むなど写譜家の自己顕示欲が現れる例があることを前節で述べたが、このBL Add. 36484も例外ではなく、全てのページの下中央には、写譜家の名前とみられる“deuid meluill”（デヴィッド・メルヴィル）の文字が刻まれている。同様に、OB MS Mus. e. 1-5は、全体を通じて装飾が施されるとともに、写譜家サドラーの名前が装飾つきで大きく書き込まれている（図2参照）。いずれも、写本の成立過程におけるメルヴィルやサドラーの立場の大きさをうかがわせると言えよう。さらに言えば、このような例はパストン写本には見られないことから、特定のパトロンを持たない写譜家が、写譜技術の高さを誇示すべく、パトロン探しの献呈用に自らの名前が入った写本を作成した可能性も考えられる²⁷。いずれにせよ、これらの写本はその統一性や装飾性から、贈呈を目的としていたことをうかがわせる。

このように、16世紀後半のイングランドで成立した写本は、その成立過程や目的も様々であったが、大きくまとめると以下の3つのタイプが存在すると言える。つまり、写本全体を貫く意図がないが、長年の間に書きためられた結果、成立した写本、コレクションとして作成された写本、贈呈用に作成された写本、である。

結

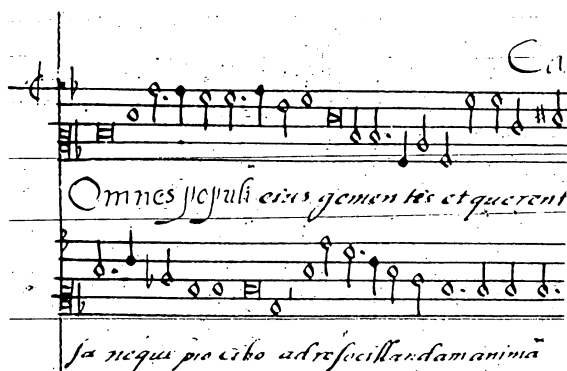
本研究は、16世紀後半のイングランドにおける楽譜の印刷・出版活動の不振について、その原因を明らかにするための手がかりを得るべく、16世紀後半に成立した写本の特徴をその成立過程から考察するものであった。その結果、16世紀後半の写本には3つのタイプが存在することを指摘した。ここでもう一度繰り返すと、写本全体を貫く意図はないが長年の間に書きためられて成立した写本、コレクションとして作成された写本、贈呈用に作成された写本、の3つである。このうち最も多いのは、最初のタイプであった。このように、全体を貫く意図はないが長年の間に書きためられて成立する写本が多かった事実は、印刷楽譜集と写本について、両者の成立過程に大きな相違があることを示していると言えるのではないだろうか。つまり、楽譜集として成立するまでの時間の長さ、楽譜集全体を貫く意図の有無、である。しかし、この点を論証するためには、さらに多くの紙面が必要である。つまり、写本と印刷楽譜集の成立過程における相違を具体的に比較し、考察しなければなるまい。この両者の比較と考察の作業につい

26 (Brett, 1964, 61-2.)

27 ところで、16世紀後半にイングランドで成立した写本の中で、貴族に献呈されたことが唯一明らかになっているのが、すでに触れた*My Ladye Nevells Booke*である。バードの鍵盤作品のみを収めたこの写本はボードウィンによって作成されたもので、写本が完成した日付と彼自身の名前が最後に記されている。しかし、近年の研究では、この写本はバードの命によりバードの監督下でボードウィンが作成したという見方が一般的である。(Gaskin, 1992); (Harley, 2005)を参照。

ては、16世紀後半のイングランドにおける楽譜の印刷・出版活動の低迷と、当時の根強い写本受容の因果関係を明らかにするためにも、今後の課題としたい。

(図1) TM, MS 354. f. 10v.



(図2) OB, MS Mus. E. 5. f. 1v.



[略字]

BL…British Library; DM…Dubliu, St. Marsh's Library; ERO…Esex Record Office;

OB…Oxford, Bodleian Library; TM…Tenbury, St. Michael's Library

[一次資料・ファクシミリ版]

London, British Library, MS Royal 20 A. xvi, introduction by Howard Mayer Brown, *Renaissance music in facsimile: sources central to the music of the late fifteenth and sixteenth centuries*, vol. 10., New York, 1987.

London, British Library, R. M. 24. d. 2., introduction by Jessie Ann Owen, *Renaissance music in facsimile: sources central to the music of the late fifteenth and sixteenth centuries*, vol. 8., New York, 1987.

Oxford, Bodleian Library, MSS. Mus. Sch. e. 376-381, introduction by John Milsom, *Renaissance music in facsimile: sources central to the music of the late fifteenth and sixteenth centuries*, vol. 15., New York, 1986.

[二次資料]

Blezzard, F. S. A. J. "Monsters and Messages: the Willmott and Braikenridge Manuscripts of Latin Tudor Church Music, 1591." *The Antiquaries Journal* 75 (1995): 311-38.

Bray, R. W. "British Museum Add. Mss. 17802-5 (The Gyffard Part-Books): an Index and Commentary." *Research Chronicle* 7 (1969): 31-50.

Bray, R. "The Part-Books Oxford, Christ Church, Mss 979-983: an Index and Commentary." *Musica Disciplina* 25 (1971): 179-97.

Bray, R. "British Library, R. M. 24 d 2 (John Baldwin's Commonplace Book): an Index and Commentary." *Research Chronicle* 12 (1974): 137-51.

Bray, R. "John Baldwin." *Music & Letters* 56 (1975): 55-59.

Brett, P. "Edward Paston (1550-1630): A Norfolk Gentleman and his Musical Collection." *Transactions of the*

- Cambridge Bibliographical Society* 4 (1964): 51- 69.
- Fenlon, I. *Cambridge Music Manuscripts, 900-1700*. Cambridge, 1982.
- Gaskin, H. "Baldwin and the Nevell hand." Blown, A. and Turbet, R. eds., *Byrd Studies*, (Cambridge, 1992): 159-173.
- Hamesley, L. "The Tenbury and Ellesmere Partbooks: New Findings on Manuscript Compilation and Exchange, and the Reception of the Italian Madrigal in Elizabethan England." *Music & Letters* 73 (1992): 177-221.
- Harwood, I. "The Origins of the Cambridge Lute Manuscripts." *The Lute Society Journal* 5 (1963): 32-48.
- Harley, J. "My Ladye Nevell' Revealed." *Music & Letters* 86 (2005): 1-15.
- Hilda, A. ed. *My ladye Nevells Booke of Virginal Music / by William Byrd*. New York, 1969.
- Mateer, D. "John Sadler and Oxford, Bodleian Mss Mus. e. 1-5." *Music & Letters* 60 (1979): 281-295.
- Mateer, D. "Oxford, Christ Church Music MSS 984-8: an Index and Commentary." *Research Chronicle* 20 (1986): 1-18.
- Mateer, D. "William Byrd, John Petre and Oxford Bodleian Ms Mus. Sch. e. 423." *Research Chronicle* 29 (1996): 21-46.
- Price, D. C. *Patrons and Musicians of the English Renaissance*. Cambridge, 1981.
- Ward, J. "The Lute Music of MS Royal Appendix 58." *JAMS* 13 (1960): 117-25.
- Ward, J. "The Fourth Dublin Lute Book." *The Lute Society Journal* 11 (1969): 28-47.
- Warren, C. W. "The Music of Royal Appendix 12-16." *Music & Letters* 51 (1970): 357-72.
- Woodfil, W. L. *Musicians in English Society: from Elizabeth to Charles I*. Princeton, 1953.
- [図書館カタログ]
- The Music Collections of the Cambridge Libraries : part one musical manuscripts before 1850 from Cambridge University Library and Ely Cathedral*. Compiled by Clifford Barlett. Brighton, 1987.
- The Music Collection of the Royal College of Music, London: a listing and guide to part one and part two of the Harvester Microfilm Collection*. Compiled by Roger Bray. Brighton, 1983.
- The Lumley Library: the Catalogue of 1609*. Edited by Sears Jayne & Francis R. Johnson. London, 1956.
- Catalogue of Manuscript Music in the British Museum*. Vol. I-III. Edited by Augustus Hughes-Hughes. London, 1906-9.

[一次資料]

Cambridge		London	
1	King's College, MS Rowe 1	48	British Museum (続き) Egerton MS 2009-2012
2	Rowe Music Library MS Rowe 316	49	Harley MS 7578
3	University Library MS Dd. 2. 11	50	Royal App. MS 12-16
4	MS Dd. 3. 18	51	Royal App. MS 17-22
5	MS Dd. 4. 22	52	Royal App. MS 23-25
6	MS Dd. 4. 23	53	Royal App. MS 26-30
7	MS Dd. 5. 78	54	Royal App. MS 31-35
8	MS Dd. 9. 33	55	Royal App. MS 36-40
9	Fitzwilliam Museum MS Mus 278 A-G	56	Royal App. MS 49-54
Chelmsford		57	Royal App. MS 55
10	Essex County Record MS D/DP Z6/1	58	Royal App. MS 57
11	Office MS D/DP Z6/2	59	Royal App. MS 58
Dublin		60	Royal App. MS 59-62
12	Trinity College Library MS 408	61	Royal App. MS 74-76
13	MS 410	62	Royal MS 20. A. xvi
14	St. Marsh's Library MS Z3. 2. 13	63	Royal MS 24. d. 2
London		64	Royal College of MS 2049
15	British Museum Add. MS 4900	65	Music Library MS 2089
16	Add. MS 5465	Oxford	
17	Add. MS 15166	66	Bodleian Library MS Mus. D. 237
18	Add. MS 17802-17805	67	MS Mus. E. 1-5
19	Add. MS 18936-18939	68	MS Mus. E. 376-381
20	Add. MS 22597	69	MS Mus. E. 423
21	Add. MS 29388-29392	70	Mus. d. 143
22	Add. MS 29485	71	Christ Church Library MS Mus. 45
23	Add. MS 29996	72	MS Mus. 371
24	Add. MS 30361-30366	73	MS Mus. 979-983
25	Add. MS 30480-30484	74	MS Mus. 984-988
26	Add. MS 30486	Shrewsbury	
27	Add. MS 30513	75	Shropshire Archives LB 15/1/225
28	Add. MS 30810-30815	76	LB 15/1/226
29	Add. MS 30820-30822	77	LB 15/1/227
30	Add. MS 30823-30825	Tenbury	
31	Add. MS 31390	78	St. Michael's MS 341-344
32	Add. MS 31392	79	College Library MS 349-353
33	Add. MS 31992	80	MS 354-358
34	Add. MS 32377	81	MS 359-363
35	Add. MS 33933 ⁽²⁾	82	MS 364-368
36	Add. MS 34000-34002	83	MS 369-373
37	Add. MS 34050	84	MS 374-378
38	Add. MS 36484	85	MS 379-384
39	Add. MS 37402-37406	86	MS 385-388
40	Add. MS 41156-41158	87	MS 389
41	Add. MS 47844	88	MS 786
42	Madrigal Society MS A. 6-11	89	MS 940-944
43	Mad. Soc. MS. G. 16-20	90	MS 1464
44	Mad. Soc. MS. G. 21-26	91	MS 1469-1471
45	Mad. Soc. MS. G. 27	92	MS 1486
46	Mad. Soc. MS. G. 28-32	Privately owned	
47	Mad. Soc. MS. G. 44-47, 49	93	My Ladye Nevel's Booke

(1) 網掛けがされているものは先行研究に依拠したもの。その他は現物（マイクロフィルムを含む）から調査した。

(2) この写本は Thomas Wode's Partbooks として知られ、QuintusはDublin, Trinity College Library MS 412として所蔵、また Cantus, Tenor, Bassusは Edinburgh University Library MS La III. 483 a-c として所蔵されている。本研究では、この British Library 所蔵の Counter Tenor パート譜のほか Quintus パート譜も検証したが、二つのパート譜の間に本研究で考慮すべき相違は見られなかったため、一つの写本とみなして BL Add. MS 33933のみ掲載した。